

自尊感情からみた保育者論

——属性と尺度構造——

渡 辺 直 人

自尊感情からみた保育者論

——属性と尺度構造——

Self-Esteem and Childcare theory

——Attributes and scale structure——

渡辺 直人

Naoto Watanabe

要 約

現在、子どもや教育・保育をめぐる様々な問題が提起されている。健康問題や生活や環境の変化、学力問題など様々な問題がある中で、子どもの心の問題が深刻化している。自死や鬱の子どもが増えている現状がある中で、それら課題解決のためにも自尊感情は一つの手がかりとなりうるであろう。特に昨今では保育体験は自尊感情の向上に役立っていることが示唆されており、保育と自尊感情の研究が求められている。本稿では、保育士養成校学生の属性、保育者の特質を調査すべく、保育者養成校学生を対象に自尊感情を測定・分析した。方法は、因子分析、Spearman の順位相関分析を行った。その結果、因子分析においては、先行研究では1因子が確認されているが、本調査では2因子確認された。

1. 問題の所在と研究の目的

(1) 問題の所在

現在、我が国では子どもや教育・保育をめぐる様々な問題が提起されている。子どもの健康問題や生活・環境の変化、学力問題など、様々な問題がある。昨今で特に深刻化している問題の一つとして、子どもの自死率の高さが挙げられている。日本人全体の自死率は下がっているものの、子ども・若者の割合は高まっていることが明らかとなっている(警察庁、2021)。20-29歳の数に関しては2019年まで減少傾向にあったが、2020年になって急増した。新型コロナウイルスによる経済縮小の影響もあると考えられる。

他、日本生産性本部の調査によれば、10-20代の「心の病」がここ数年で大きく増加傾向にあることがわかっており、20代が全体数の3割を占める結果もでている。「心の病の最も多い年齢層」をみると、10-20代に関して、2004年では全体の10.4%と全体の約1割であったが、2019年では30.6%と全体の3割と上昇していることが明らかとなり、若者の心に関する問題は深刻化しているといえよう。

これらに関連して、青年の自尊感情も低迷している。自尊

感情は「自分自身に価値があり、よりよいと思うこと」である。様々な問題がある中、自尊感情は諸問題解決のための大きな鍵となるのではないだろうか。

自己否定的な若者も多く、他国と比較してもその低さは顕著である。他国との比較を検討しているデータはいくつかあり、例えば国立青少年教育振興機構の調査「高校生の心と体の健康に関する意識調査報告 —日本・米国・中国・韓国の比較—」を概観すると、自己肯定感・自己評価のアンケート10項目中9項目で日本が最下位であった。

日本人の若者の自身に対する評価が低いことは、以前から多くの研究者によって指摘されているところである。そして上述したよう全体の自死率が低下している中、若者の自死率はそれに反して高まっていることは大きな課題であり、子ども・若者の心の問題に関しては早急に解決を目指した取り組みが必要であろう。

(2) 自尊感情とは

この自尊感情は、英語では“Self-Esteem”と訳されることが多い。類語には“自尊心”や“自己肯定感”という言葉もある。

自尊感情は「自分自身に価値があり、よりよいと思うこと」であるが、“自尊心”はこのようなポジティブな意味合いではなく、“高いプライド”“といった意味でいわれることが多く、比較すればネガティブな意味合いである。“自己肯定感”は自尊感情と同義語として扱う研究者もいる。これらは全体的に多くの類似点があることから（例えば、田中(2005)の自己肯定感尺度と、Rosenbergの自尊感情尺度等）、これらは区別されずに同義語として扱うこともある。研究史的には自尊感情の方が古く、研究もこちらの方が取り組まれている現状がある。

この自尊感情に関して、初期にはW.Jamesが提唱したのがはじまりである。今では多くの研究者によって検討されている分野であるが、この自尊感情は現在では二種類存在することが指摘されており、「Very good(とても良い)」の面、そして「Good enough(それで良い)」の面の二つがあるともいわれている。このGood enoughの面をRosenbergの尺度でははずねているともいう(内田, 2010)。

他にも多くの論者がおり、例えば近藤は、自尊感情は基本的自尊感情と社会的自尊感情の二種あるという。近藤によると、「基本的自尊感情は、他者との比較や相対的な評価によるものではなく、いわば絶対的で無条件の感情として心の内に存在するものである。つまり、「生きていていい、このままでいい、これ以上でも以下でもない、自分は自分」といったように、ありのままに自分自身を受け入れる感情であり、他者との比較でなく、絶対的、無条件、根源的で永続性のある感情であるといえよう。」と述べている。そして社会的自尊感情に関しては、「他者との比較によって相対的なものとして形成される感情であり、「とても良い、できることがある、役に立つ、価値がある、人より優れている」といったように他者の存在を前提としており、他者との比較で、どこまでも際限がなく、相対的、条件付、表面的で一過性の感情である。」と述べている(近藤, 2014)。そして、近藤の理論の特徴として、両者とも必要な感情であるという点であり、バランスよく身に着けることが重要であるという。

自尊感情をめぐる様々な論者がいるが、これは上述したようW.Jamesが1890年に述べた論が起因となっている。W.Jamesは自尊感情(Self-Esteem)に関して、「人の自分自身についての評価、あるいは自分自身に対する態度を意味している。」と定義している(仁平, 2015)。そしてこれらに関して「自尊感情=成功/願望」と定式している。

その後、Rosenbergなど様々な論者によって研究が進められてきた。その研究は専ら質問紙調査による量的研究が主流

である。

その自尊感情の測定に関しては、Rosenberg(1965)が作成した尺度の10項目を用い、4件法、もしくは5件法で行うことが基本となっている。これは多くの研究者によって翻訳され、初期には星野訳(1970)、山本訳(1982)が多く使われてきた。使用頻度に関しては、1965年から2005年の間に行われた研究を対象とした結果、山本訳が最も多く、次点で星野訳だったという(並川ら, 2006)。しかし課題も多く、信頼性・妥当性の面からしばしば再検討されている尺度であり、今では桜井訳(2000)やMiura&Griffith訳(2007)などのさらに検討を加えた翻訳版が存在する。

この尺度は基本的に1因子であるといわれる。しかしながら、それに関して属性毎に検討を行った研究は乏しい。一般化して1因子と明示する以上、様々な属性を対象に調査し、比較・検討する必要があると考える。

(3) 保育・文化資本と自尊感情

そのような中で、子どもの成長に携わる保育に着目したい。最も著しく成長する時期が幼児期であり、この時期での育ちは子どもの発達に大きく関わることは自明のことである。また、このころの育ちは身体だけではなく心や感性といった内面の育ちにも影響を与えるといわれる。例えばボウルビィのアタッチメントは有名な理論である。その他にも参考になる理論として文化資本論が挙げられるだろう。これは教育社会学者のピエール・ブルデューが提唱した理論であり、諸資本は家庭や教育によって再生産されることを指摘している。その中で、ハビトゥスと呼ばれる身体化文化資本が継承されるという。具体的に、ハビトゥスとは「人々の日常経験において蓄積されていくが、個人にそれと自覚されない知覚・思考・行為を生み出す性向」だという。このように養育者から子へと諸資本が無意識的に・無意識のうちに継承されていくことを考えると、保育士は子どもの育ちに大きく影響を与える一つとして考えられる。また、自尊感情と文化資本の関連の研究は筆者が調査した以上では見受けられなかったが、これも同様に子どもに受け継がれるものであるとするのであれば、養育者は子どもの育ちや自尊感情、心の発達において極めて重要な位置についているといえ、保育士の自尊感情を探ることはこれら課題解決の一助にもなりえよう。

また、先行研究によれば、保育は自尊感情を高めることも示唆されている。叶内・倉持(2013)は、中学生を対象とした幼

児保育体験の前後に自尊感情を測定した。実践前の測定で全体の下位 25%だった中学生は、実践後に有意に高まったという。また、河岸・綿引(2006)は高校生に幼児保育体験前後に自尊感情を測定しているが、幼児保育体験後の方が、有意に平均値が高かったという。これらのことから、幼児保育体験は自尊感情の向上のための一助となっていることが示唆されている。ただし、先行研究の数は多いとはいえない。保育学・自尊感情研究の発展のためにも、これらの関連の更なる検討が求められよう。

保育者は、仕事の特性としても対人関係が重要となっている職業であり、対人スキルも磨かれる仕事であろう。保育協議会のマニュアルには、「保育という仕事は“人を育てる”仕事である。人の気持ちを感じ取り、寄り添い、人に安心感を与え、その人自身が自分の力で判断し意欲的に生活できるよう援助していく仕事である。この仕事内容は、相手が子供であっても、保護者であっても、地域の親子家庭であっても同じである。」「“保育士の資質の向上”それは、広い視野と豊かな感性・人間味のある心を持ち続けること、そして社会情勢にも目を向けながらも、“人として大切なこと。子ども達にとって必要なこと”をしっかりと見極めて、じっくり保育に励んでいく努力を続けることではないかと感じている。」と示されている。このことから、人と人の関わりを職としての専門性ないし資質の一つとなっていることがいわれており、一般以上にその資質を高く持っていることがうかがえる。

ただ、これらも一概に保育士と包括することはできない。しばしばいわれることとして、1年目から3年目を「新人」、4年目から10年目を「中堅」、それ以降を「ベテラン」と呼ぶこともある。これらの括りに関しては明確に示されたものはないが、経験者と新人を一括りにすることは難しい。また、専門性を要する職である以上、ある程度の段階ごとに区分することに違和感はない。本稿では、先に挙げた1年目から3年目を「新人」、4年目から10年目を「中堅」、それ以降を「ベテラン」で区切り、さらに、「新人」の前に「保育士養成校学生」を付け加えたい。

常日頃から幼児保育のことを考え、多くの実践系授業を受けている保育士養成校の学生は、自分自身に関してどのように捉えているのであろうか。当該養成校授業は、職種の性質からも、製作や演習・実習系の授業が多く、グループワークや人との協力、話し合う活動が多い。また、多くの学生が子どもを保育したいという夢を持ち来ている学生も多く、一般平均的な学生とは自尊感情の性質は異なるのではないだろうか。こ

れらを明らかにすることは、今後の保育者養成や保育者論の発展にも寄与できよう。また、自尊感情研究にも大きな役割を果たし、昨今の子どもたちを取り巻く深刻な状況、心の問題などの諸問題解決のための一つの糸口にもなりうると考える。

以上、本研究では保育に携わる者の自尊感情の構造を明らかにする。また、本稿では保育に携わる者として、四つの段階のうち、保育士養成校学生を対象とする。

2. 方法

(1) 調査日時・対象者

2020年12月16日、授業終了後に調査を実施した。調査対象者は、関西地方A短期大学1年生72名を対象とした。

(2) 調査方法・調査内容

自記式のアンケート調査を実施した。5件法を採用し、「1」に近づくほど「そう思わない」、「5」に近づくほど「そう思う」とした。調査内容は、Rosenbergの自尊感情尺度10項目である。Mimura C & Griffiths(2007)の尺度を用いた。

(3) 調査の手続き

授業終了後にアンケートを取得した。調査の方法は、オンライン上で行い、その際にはGoogle社が提供しているGoogle Workspaceアプリケーションの一つであるGoogle Form、及びGoogle Spreadsheetを用いた。

(4) 分析方法

分析方法は基本統計量を算出し、主成分法プロマックス回転法で因子分析を行った。そののち、尺度内項目の関連性をみるべく、Spearmanの順位相関係数を求めた。なお、分析にはShimizu(2016)の分析プログラムを使用している。また、欠損値には平均値を代入している。

(5) 倫理的配慮

調査に当たって、倫理に十分配慮し、個人情報厳格に管理し外部に漏れることはないこと、得た情報の目的外利用はしないこと、調査の回答・協力は任意であることを告知している。

3. 結果

(1) 基本統計量

表1 自尊感情尺度の基本統計量

変数名	N	M	SD	Min.	Max.
① 私は、自分自身にだいたい満足している。	62	2.65	1.16	1	5
② 時々、自分はまったくダメだと思うことがある。	62	4.21	0.81	2	5
③ 私にはけっこう長所があると感じている。	62	2.45	1.05	1	5
④ 私は、他の大半の人と同じくらいに物事がこなせる。	62	2.69	1.06	1	5
⑤ 私には誇れるものが大してないと感じる。	62	3.31	1.06	1	5
⑥ 時々、自分は役に立たないと強く感じることもある。	62	3.24	1.08	1	5
⑦ 自分は少なくとも他の人と同じくらい価値のある人間だと感じている。	62	2.85	0.87	1	5
⑧ 自分のことをもう少し尊敬出来たらいいと思う。	62	3.77	0.82	2	5
⑨ よく、私は落ちこぼれだと思ってしまう。	62	3.13	1.09	1	5
⑩ 私は、自分のことを前向きに考えている。	62	3.23	0.95	1	5

注) 5 件法でアンケートを行った。

表2 本調査結果と先行研究結果の比較

質問項目	本調査結果	先行研究結果
① 私は、自分自身にだいたい満足している。	2.65	2.54
② 時々、自分はまったくダメだと思うことがある。	1.79	1.95
③ 私にはけっこう長所があると感じている。	2.45	2.6
④ 私は、他の大半の人と同じくらいに物事がこなせる。	2.69	2.74
⑤ 私には誇れるものが大してないと感じる。	2.69	2.53
⑥ 時々、自分は役に立たないと強く感じることもある。	2.76	2.29
⑦ 自分は少なくとも他の人と同じくらい価値のある人間だと感じている。	2.85	2.82
⑧ 自分のことをもう少し尊敬出来たらいいと思う。	2.23	2.12
⑨ よく、私は落ちこぼれだと思ってしまう。	2.87	2.68
⑩ 私は、自分のことを前向きに考えている。	3.23	2.82
尺度得点	2.62	2.51

表3 因子分析の結果

項目	Factor1	Factor2	共通性
Factor 1 「ポジティブ項目」 $\alpha = .81$			
⑩ 私は、自分のことを前向きに考えている。	0.81	-0.10	0.67
① 私は、自分自身にだいたい満足している。	0.81	-0.10	0.66
③ 私にはけっこう長所があると感じている。	0.75	-0.25	0.62
⑦ 自分は少なくとも他の人と同じくらい価値のある人間だと感じている。	0.65	-0.23	0.47
④ 私は、他の大半の人と同じくらいに物事がこなせる。	0.55	-0.17	0.34
Factor 2 「ネガティブ項目」 $\alpha = .75$			
⑧ 自分のことをもう少し尊敬出来たらいいと思う。	0.14	0.79	0.65
⑥ 時々、自分は役に立たないと強く感じることもある。	-0.49	0.64	0.65
⑤ 私には誇れるものが大してないと感じる。	-0.29	0.62	0.46
⑨ よく、私は落ちこぼれだと思ってしまう。	-0.51	0.58	0.59
② 時々、自分はまったくダメだと思うことがある。	-0.44	0.45	0.40
因子寄与	3.39	2.12	

質問内容は、「①私は、自分自身にだいたい満足している。」、「②時々、自分はまったくダメだと思うことがある。」、「③私にはけっこう長所があると感じている。」、「④私は、他の大半の人と同じくらいに物事がこなせる。」、「⑤私には誇れるものが大してないと感じる。」、「⑥時々、自分は役に立たないと強く感じることもある。」、「⑦自分は少なくとも他の人と同じくらい価値のある人間だと感じている。」、「⑧自分のことをもう少し尊敬出来たらいいと思う。」、「⑨よく、私は落ちこぼれだと思ってしまう。」、「⑩私は、自分のことを前向きに考えている。」の10項目である。Mimura & Griffiths (2007)が開発し、内田・上埜 (2010)が検討した尺度「RSES-J」を使用した。なお、②、⑤、⑥、⑧、⑨は逆転項目として設定されている。

まず、基本統計量を表1に示す。すべての項目で、有効回答は62名であった。

(2) 先行研究との比較

次に、先行研究(内田ら、2010)に示されている平均値と比較した(表2)。①は、本調査(2.65)と比較し、内田らの結果(2.54)の方が低かった。②は、本調査結果(1.79)と比較し、内田らの結果(1.95)の方が高かった。③は、本調査結果(2.45)と比較し、内田らの結果(2.6)の方が高かった。④は、本調査結果(2.69)と比較し、内田らの結果(2.74)の方が高かった。⑤は本調査結果(2.78)と比較し、内田らの結果(2.53)の方が低かった。⑥は本調査結果(2.76)と比較し、内田らの結果(2.29)の方が低かった。⑦は本調査結果(2.85)と比較し、内田らの結果(2.82)の方が低かった。⑧は本調査結果(2.23)と比較し、内田らの結果(2.12)の方が低かった。⑨は本調査結果(2.87)と比較し、内田らの結果(2.68)の結果の方が低かった、⑩は本調査結果(3.23)と比較し、内田らの結果(2.82)の方が低かった。尺度得点は、本調査結果(2.62)と比較し、内田らの結果(2.51)の方が低かった。

以上、①、⑤、⑥、⑦、⑧、⑨、⑩、尺度得点は本調査結果の方が高く、②、③、④は内田らの結果の方が高かった。

また、これら平均値を各変数とし、Mann-WhitneyのU検定を行い代表値の比較を行った。その結果、有意な差は認められなかった($N=10$, $U=77$, $p=0.28$)。この結果から、本調査結果と内田らの調査結果では差がないことが示された。

(3) 因子分析の結果

次に因子分析の結果を表3に示す。手法は主成分法バリマ

ックス回転を用いた。固有値は1以上に設定し分析を行った。その結果、2因子が確認された。第1因子を「ポジティブ項目」(「①私は、自分自身にだいたい満足している。」、「③私にはけっこう長所があると感じている。」、「④私は、他の大半の人と同じくらいに物事がこなせる。」、「⑦自分は少なくとも他の人と同じくらい価値のある人間だと感じている。」、「⑩私は、自分のことを前向きに考えている。」)と命名した。そして第2因子を「ネガティブ項目」(「②時々、自分はまったくダメだと思うことがある。」、「⑤私には誇れるものが大してないと感じる。」、「⑥時々、自分は役に立たないと強く感じることもある。」、「⑧自分のことをもう少し尊敬出来たらいいと思う。」、「⑨よく、私は落ちこぼれだと思ってしまう。」)と命名した(表3)。

(4) 相関分析の結果

次に、Spearmanの順位相関分析を行った結果を以下に示す。この10項目それぞれの相関関係を確認した。有意水準 $\alpha=.10$ に設定した。

自尊感情尺度は、基本的に1因子の一貫性のある尺度として知られている。基本的に尺度内相関は高いことが考えられるため、以下では有意な相関関係が確認できなかった項目を示すこととする。

Spearmanの順位相関の結果、有意な相関関係が確認できなかった組として、「①私は、自分自身にだいたい満足している。:⑧自分のことをもう少し尊敬出来たらいいと思う。」、「④私は、他の大半の人と同じくらいに物事がこなせる。:⑦自分は少なくとも他の人と同じくらい価値のある人間だと感じている。」、「④私は、他の大半の人と同じくらいに物事がこなせる。:⑧自分のことをもう少し尊敬出来たらいいと思う。」、「⑦自分は少なくとも他の人と同じくらい価値のある人間だと感じている。:⑧自分のことをもう少し尊敬出来たらいいと思う。」、「⑧自分のことをもう少し尊敬出来たらいいと思う。:⑩私は、自分のことを前向きに考えている。」が挙げられた。それ以外の組において、有意水準 $p<.01$ 、 $p<.05$ 、 $p<.10$ で有意な相関関係が確認された。

また、因子の尺度得点をもとに、因子間においてもSpearmanの順位相関係数を求めた。その結果、有意な相関関係が確認された($r=.62$, $p<.01$)。

以上、尺度内は概ねの項目で関連があり、因子間も有意な相関関係があったことから、尺度内の妥当性・一貫性は高いと考える。

表4 相関分析の結果

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
①	1.00									
②	-0.44 **	1.00								
③	0.54 **	-0.39 **	1.00							
④	0.44 **	-0.33 **	0.56 **	1.00						
⑤	-0.21 +	0.27 *	-0.44 **	-0.24 +	1.00					
⑥	-0.43 **	0.49 **	-0.46 **	-0.34 **	0.42 **	1.00				
⑦	0.52 **	-0.23 +	0.47 **	0.17	-0.43 **	-0.47 **	1.00			
⑧	-0.17	0.24 +	-0.26 *	-0.07	0.34 **	0.27 *	-0.20	1.00		
⑨	-0.43 **	0.46 **	-0.41 **	-0.31 *	0.45 **	0.69 **	-0.36 **	0.23 +	1.00	
⑩	0.56 **	-0.43 **	0.52 **	0.29 *	-0.35 **	-0.37 **	0.44 **	-0.03	-0.53 **	1.00

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

表5 有意差が確認できなかった組

I	「①私は、自分自身にだいたい満足している。：⑧自分のことをもう少し尊敬出来たらいいと思う。」
II	「④私は、他の大半の人と同じくらいに物事がこなせる。：⑦自分は少なくとも他の人と同じくらい価値のある人間だと感じている。」
III	「④私は、他の大半の人と同じくらいに物事がこなせる。：⑧自分のことをもう少し尊敬出来たらいいと思う。」
IV	「⑦自分は少なくとも他の人と同じくらい価値のある人間だと感じている。：⑧自分のことをもう少し尊敬出来たらいいと思う。」
V	「⑧自分のことをもう少し尊敬出来たらいいと思う。：⑩私は、自分のことを前向きに考えている。」

表6 因子間の相関係数

「ポジティブ項目：ネガティブ項目」	$r = .62$	$p < .01$
-------------------	-----------	-----------

4. 考察

本研究では、保育者養成校学生の特性を明らかにすべく、自尊感情を測定した。分析の結果、まず先行研究の平均値と差がないことが明らかとなった。また、因子分析では、「ポジティブ項目」と「ネガティブ項目」の2因子が確認できた。

先行研究によれば、幼児保育体験は自尊感情の向上の一助となることが明らかとなっている。常に保育のことを勉強し、実習や演習で幼児と関わる保育者養成校学生は自尊感情も高いことが予想されたが、実際には平均値に差がなかった。このことに関して、全く関係のない属性の人物が保育の体験をするからこそ自尊感情が高まった、もしくは、常に保育に接しているとその効果が薄れていく、といった結果が予測できるが、それに関しては本研究の目的対象外であるため、今後の課題としたい。

他、Rosenbergの自尊感情尺度は、基本的に1因子で構成されていることが確認できる。しかしながら本調査においては、1因子ではなく2因子が確認できた。

その結果に関して、1因子ということはこれら10項目における潜在変数が1つということである。したがって10項目は同潜在変数に含まれる同属性の項目であるといえるが、しかしながら本研究では2因子が確認できた。2因子ということは、それら項目が別種のものであることを示す。

項目を概観すると逆転項目となるネガティブ項目と、自信を示すポジティブ項目とでわかれている。これは言い換えるならば、被験者が質問項目を読み取る際、その質問が前向きか否か(ポジティブかネガティブか)を、他属性の人物と比し重視している、もしくはそういった言葉の表現に極めて敏感であると考えられるのではないだろうか。結論として、保育者養成校学生は、他属性と比し表現を重視している傾向が強いことが示されたといえよう。

ただし、課題としてサンプル数は十分ではないことが挙げられよう。十分な数を担保すれば、また新たな知見を見出せられる可能性もあると考える。

また、本結果では逆転項目と普通の項目で分類されたが、逆転項目を採用している尺度は他にも数多く存在する。質問

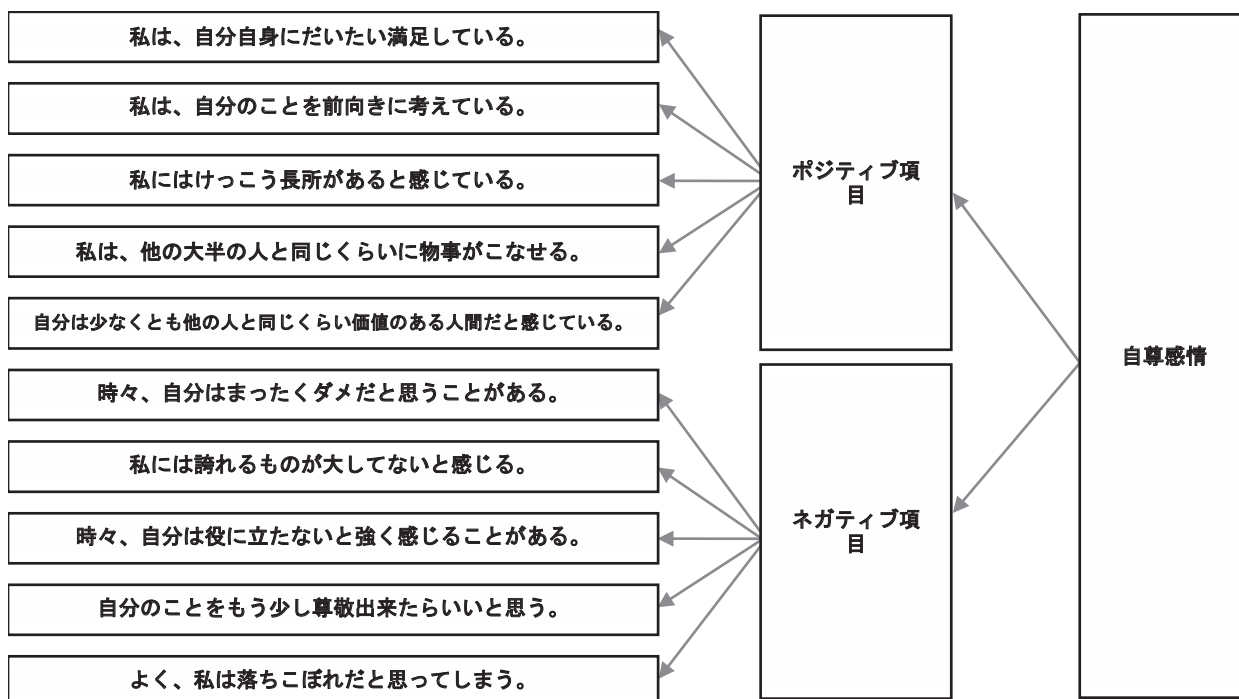


図1 保育者養成校学生の自尊感情構造

紙の作成において、逆転項目を設定することは調査上でも望ましいことであり、出鱈目な回答の除外が期待できるうえでも有用な項目のため、多くの尺度で採用されている。保育者養成校学生が逆転項目やネガティブな表現に敏感なのであれば、他の尺度でも同様に逆転項目と一般項目で因子がわかれるであろうが、その点は本研究では検討していない。また、逆転項目ではないにしても、表現に関して敏感に反応するというのであれば、他の尺度であっても表現の違いで因子が分かれることが想定できるが、それを確認した先行研究は筆者が調査した上では確認できず、これは本研究においても研究対象・目的の範囲外であるため触れられなかったが、今後はこれら課題を克服し、さらなる検討が求められよう。

また、本調査に関連した先行研究が乏しいことも調査の中で垣間見られた。例えば星野(1970)や山本(1982)が訳した尺度で測定された調査は、多くの先行研究が存在する。しかしながら Miura & Griffith (2007) の逆翻訳を経た尺度での先行研究は少なく、基本統計量が記載されていない報告も多いため、比較は内田ら調査のみとなった。

最後に、相関分析では有意差がでない結果に着目したが、その結果では「④-⑦」以外では「ポジティブ項目-ネガティブ項目」という組で有意差が確認できなかったことが示された。ただ、因子間には有意な相関関係が認められている。この結果に関しては本研究の限界点でもあり、大きな課題の一つでもある。

今後は、十分な議論がつけられなかった上記課題点を、さらなる検討を加え、考究していきたいと考える。

謝辞

本調査にご協力いただいた皆様におかれまして、ここに改めて御礼申し上げます。この度はご協力いただきまして、誠にありがとうございました。

参考文献

警察庁(2021)「令和2年中における自殺の状況」
https://www.npa.go.jp/safetylife/seianki/jisatsu/R03/R02_jisatuno_joukyou.pdf, 2021年9月29日取得。
 国立青少年教育振興機構(2018)「高校生の心と体の健康に関する意識調査報告 ー日本・米国・中国・韓国の比較ー」
<https://www.niye.go.jp/kanri/upload/editor/126/File/report.pdf>, 2021年9月28日取得。

公益財団法人 日本生産性本部(2019)「第9回「メンタルヘルスの取り組み」に関する企業アンケート調査結果 「心の病」多い世代 20代が初めて3割を超える」<https://www.jpcc-net.jp/research/assets/pdf/R4attached.pdf>, 2021年9月29日取得。

田中道弘(2015). 自己肯定感尺度の作成と項目の検討. 人間科学研究, 13, 15-27.

Rosenberg, M. 1965 Society and the adolescent selfimage. Princeton University Press.

James, W. (1890). The Principles of Psychology. Dover Publication.

仁平義明(2015). 「自尊感情」ではなく「自尊心」が“Self-esteem”の訳として適切な理由 Morris Rosenberg が自尊心研究で言いたかったこと. 白鷗大学教育学部論集, 9, 2, 357-380.

近藤卓, 山田由美子, 田淵愛子, 望月美紗子(2015). 基本的自尊感情理解のための小中学生用教材の開発 ーフェルト製教材の作成と期待される効果ー. 山陽論叢, 21, 159-164.

星野命(1970). 感情の心理と教育. 児童心理, 24, 1445-1477.

山本真理子, 松井豊 山成由紀子(1982). 認知された自己の諸側面. 教育心理学研究, 30, 64-68.

桜井茂男(2000). ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討. 発達臨床心理学研究, 12, 65-71.

内田知宏, 上埜高志(2010). Rosenberg 自尊感情尺度の信頼性および妥当性の検討 ——Mimura & Griffiths 訳の日本語版を用いて——. 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 58, 2, 257-266.

並川努, 脇田貴文, 野口裕之(2006). 評定尺度法に関する諸問題の検討 I-Rosenberg 自尊尺度を用いた予備的検討. 日本教育心理学会第48回総会発表論文集, 96.

Mimura C & Griffiths P. (2007). A Japanese version of Rosenberg Self-Esteem Scale: Translation and equivalence assessment. J Psychosomatic Res, 62, 589-594.

大辞林. “大辞林 第三版の解説 ハビトゥス【habitus】”コトバンク,

<https://kotobank.jp/word/%E3%83%8F%E3%83%93%E3%83%88%E3%82%A5%E3%82%B9-116001>, 2021年12月27日取得。

日本保育協会(2006)「保育士マニュアル」

<https://www.nippo.or.jp/Portals/0/images/research/kenkyu/h18manuall.pdf>, 2021年9月29日取得.

河岸美穂, 綿引伴子(2006). 保育体験における高校生の意識変化と保育体験についての周囲の意識. 日本家庭科教育学会大会・例会・セミナー研究発表要旨集, 48, 第48回日本家庭科教育学会大会, 23.

叶内茜, 倉持清美(2013). 家庭科の幼児とのふれあい体験を通じた中学生の自尊感情の変化について. 一般社団法人日本家政学会研究発表要旨集, 65, 114.

Shimizu, H. (2016). An introduction to the statistical free software HAD: Suggestions to improve teaching, learning and practice data analysis. *Journal of Media, Information and Communication*, 1, 59-73.

(なお、本研究に開示すべき COI 関係にある企業等はありません。)

(Naoto WATANABE)